

「被災者 心のケア大事」

熊本へ派遣 高山日赤医師ら報告

高山赤十字病院から

熊本地震の被災地に派遣された医師らが二十六日、高山市天満町の同病院で現地での活動を報告した。

外科医師の末次智成さんは、熊本市の熊本赤十字病院に二十一日から、南阿蘇中学校などの救護所には医師や看護師ら八人が二日から滞在。二十五日まで、けが人の手当

にあたった。

この日は、末次さんと救急部長の脳外科医、加藤雅康さん(四〇)と看護師長の伊藤はるみさん(五〇)が報告。末

次さんは災害現場への派遣は初めてで、「余震は日中で二~三回、夜は一、二回あつた。地元の人は敏感になつていて、悲鳴が上がつていて、悲鳴が返つた。腹痛で救急車で運ばれてきた十八歳

の女性は、地震の翌日からトイレの水が止まり、用が足せずにいた」という。「ストレスがたまり、不安を感じている人が多かった。話を聞くことで心のケアをすることが大事だと痛感した」と話した。

加藤さんと伊藤さんは、五年前の東日本大震災でも岩手県に派遣された。救護所での診療や、感染症を

防ぐための衛生管理などについて報告した。

(片山さゆみ)



救護活動について報告する（左から）伊藤さん、加藤さん、末次さん＝高山市天満町の高山赤十字病院で